Z32-B88

修監 馬生島有村藤崎島

船の金

十一月號

K2A-16

大正八年十一月一日發行大正八年十月四日印刷納本（毎月一回一日發行）

国立国会
8. 3. 26
図書館

第一卷第一號

創刊號

「金の船」第一卷第一號

落葉（表紙、石版刷）……岡本歸一
女神（口繪、三色版）
鈴虫の鈴（曲譜）……北村季晴
秋のとんぼ（童謡）……若山牧水
泥棒と犬の子（童話）……有島生馬
小猿の話（童話）……大江正野
目から火が出た（童話）……山本作次
ヂヤックと豆の蔓（繪話）……
黒姫（童話）……齋藤佐次郎
鈴虫の鈴（童謡）……野口雨情
猫おぢの太夫（童話）……谷光之助
神様の御褒美（童話）……志谷波郎

三疋の小兎（童話）……山口光次郎
船頭の子（童謡）……西條八十
親鳥小鳥（童話）……德永壽美子
バラの花が咲いたはじめ（童話）……吉田六郎
燕の王子（童話）……横山壽篤
金の船（童謡）……山田邦子
ララちやん（童話）……一ノ倉隆子
幸福の星（童話）……須藤鐘一
金の卵（繪話）……
子供の自由畫……山本鼎
馬鹿七（童話）……沖野岩三郎
通信……
社告……
さし繪……岡本歸一
製版……田中松太郎

女神

お日様が、やうやく東の空に現はれたころ、王妃の寝てゐらつしやるお部屋へ、まぶしい程立派なお姿をした女神が、入つてお出でになりました。王妃がびつくりしてゐらつしやると、女神はニコ〳〵笑ひながら

「なさけ深い王妃様。あなたの様に心の美しい方はありません。私は必ずあなたを仕合せな人にして上げます。」と、仰いました。（二十二頁、「黒鷄」より）

金の船

十一月号

第一巻　第一号

鈴虫の鈴

（「金の船」曲譜その一）

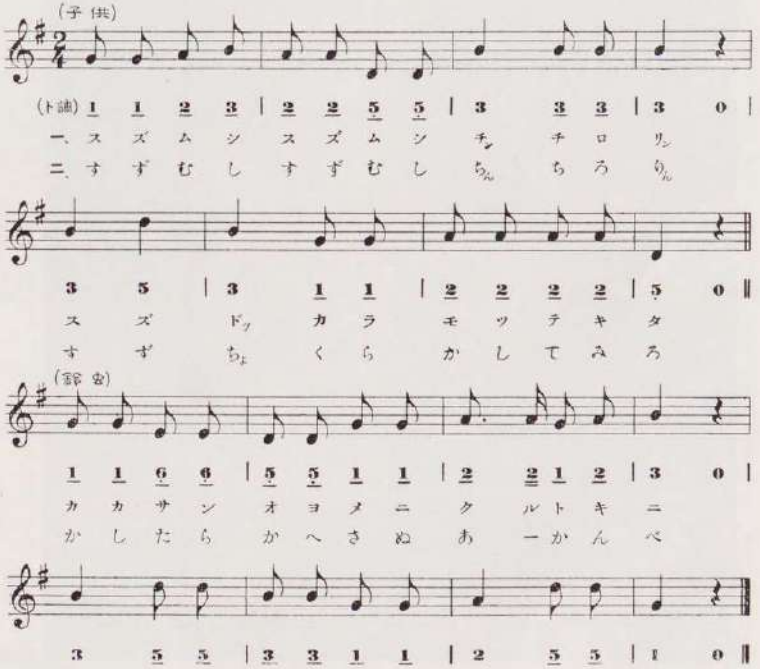
作曲　北村季晴
作歌　野口雨情

（子供）
鈴虫、鈴虫　チンチロリン
鈴何處から　持つて來た

（鈴虫）
母さんお嫁に　來るときに
番頭に負はせて　持つて來た

（子供）
鈴虫、鈴虫　チンチロリン
鈴ちよつくら　貸して見ろ

（鈴虫）
貸したら返さぬ　あーかんべ
番頭に負はせて　やつちやつた



秋のとんぼ

若山牧水

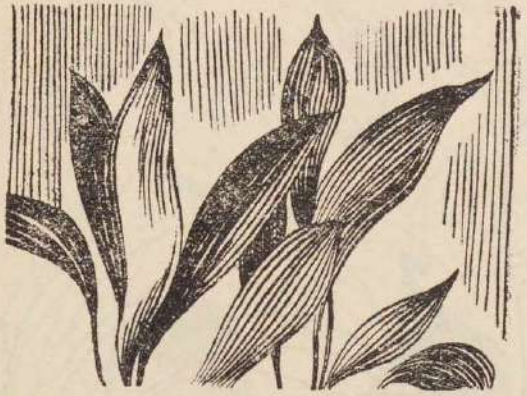
茅萱のうへに
ほろほろと
きいろい
胡桃の葉が落ちる

茅萱の蔭から
ゆめのよに
赤い蜻蛉が
まひ立つ

とんぼ可愛や
夕日のさした
胡桃の幹に
行つてとまる

泥棒と犬の子

有島生馬



一

ある月のない、暗い晩でした。正夫さんのお家の白塗りのお土藏のかげに、一人の氣味の惡い大きな男が忍び足でそつとやつて來ました。さうしてそこに立停つて、お家の中の樣子を耳を澄して聞いてゐました。もう皆んな內の人は寢たらうか、犬や夜番は來ないだらうかと思つたのでせう。此男は泥棒でした。手には一挺の斧をさへ持つた恐ろしい泥棒でした。

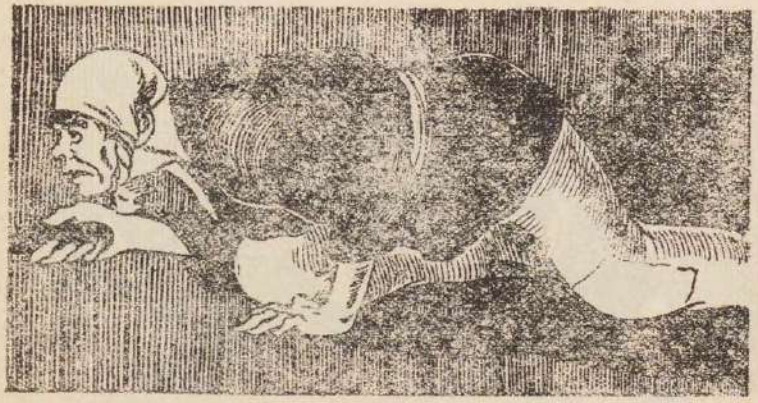
泥棒は尙暫らくじつと立つてゐました。內の中は森として誰れも起きてゐる樣子はありません。泥棒は少し安心して、土藏の前の廊下を破つて家の中へ這入らうと思ひ、そろ〳〵仕事にかゝり始めました。

ばりつ〳〵。と板をはがしにかゝりました。

ばりつ〳〵。板は少しづゝはがれました。

すると何んだか床の下の方から、うん〳〵と呻る幽かな聲がします。はつと思つて泥棒は板をはがすのを止めました。するとその呻る聲も停りました。又暫らくしてばりつ〳〵とはがしにかゝりました。すると又うん〳〵といふ幽かな呻聲が聞えます。はてな、不思議だなと泥棒は思ひました。こんな處に人の隱れてゐる筈はないし、猫や犬なら、にやんとか、わんとか云ふだらうし、はて不思議な事があるものだと思ひました。

でも板をはがしたり、考へたりしてゐる內にとう〳〵這ひ込める丈けの穴が出來たので、怖は〳〵泥棒は床下にもぐり込んで行つてみました。處がどうでせう、そこに一疋の白犬が目を光らせて苦しそうにねてゐるではありませんか。もと〳〵犬と泥棒は犬の仲惡ですのに、その犬は泥棒を見ても、幽かに呻る許りで、大きな聲では吠えもしません。泥棒は不思議に思ふと一緒に、その犬が急に可愛らしくなりました。俺さへ見れば、どこの犬でも直ぐ吠えついたり、嚙んだりするのに、この犬はどうしたといふおとな



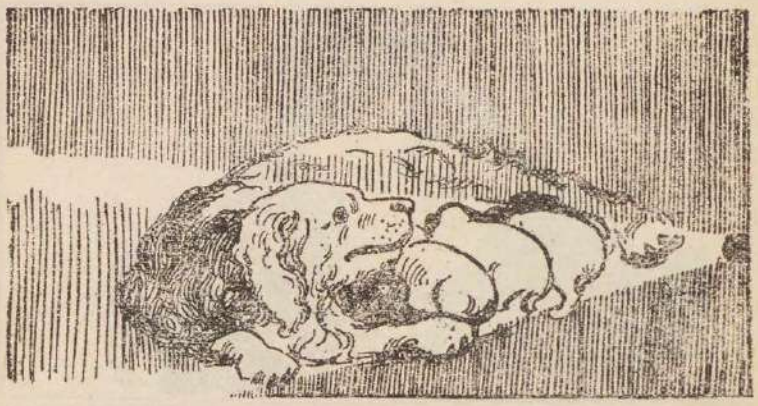
しい犬だ。さういふ懐しい心持で段々犬の方へ近寄つてみました。

近づいてみると、白犬は吠えない筈です。病氣も何か、苦し相な聲を出して呻つてゐるのです。泥棒はもう仕事の事を忘れて、犬の事許り思ひました。さうして懐中電燈を出して、暗闇を照してみました。どうでせう、病氣かと思つた白犬は、今恰度小さな子犬を生んだ許りで、弱りきつてゐる所でした。一つ二つ三つ、おやまだこゝにもゐる、四つ五つ、おや〳〵まだゐる六つ七つ、七つも生んでゐる。泥棒はさう云ひながら、まだ動けもしない死んだやうな子犬に見とれてゐました。

泥棒は自分の家で子供が生れた時の事を、思ひ出してみたりしました。

子犬は親犬が少し許り掘り下げた、しめつた土の中で、あんころ餅のやうになつて、ごろ〳〵してゐました。泥棒はこれでは可哀相だと思つたので、そつと外へ這ひ出し、さつき見て來た物置から、一枚の莚を持つて來て、子犬の下に敷いてやりました。

そんな事をしてゐる間に時もたち、もうそれから土藏を破つたりするのも、面倒になつたので、そのまゝ泥棒は、そつと正夫さんの家の塀を乗り越えて、逃げて行つて終ひました。



二

それから二日たちました。

正夫さんがお土藏の方へ行く度に、なんだか床下で呻り聲が聞えるやうな氣がするのです。

「お母さま、お藏前には何かゐるやうですね。」

さう云ひますとお母さまは、

「そんな筈はありませんよ。」

とおつしやるのです。

その翌日も、その翌日も正夫さんは同じやうに云ひましたけれども、お母さまは、そんな筈はありませんよ。と許りおつしやいました。正夫さんは少し不平でゐました。

三日目に正夫さんがお藏の前に行くと、床下ではつきり、きう〳〵いふ聲が聞えてゐます。そこへ女中の竹も來て、

「ぼっちやま、本統に何かこの下にをりますね。」
と云つたので、正夫さんは直ぐ父お母さまの處へ行つて、無理に手を引張つてそこへ連れて來ました。
「そらご覽なさい。こんなに何か鳴いてゐるではありませんか。」
正夫さんは得意で云ひました。
「あら本統ね。」
お母さまも今度は驚いて、
「竹この廊下の上げ板を上げて這入つてごらん。」
とおつしやつたので、竹は早速さうしました。でも中が暗いので、提灯をつけて這入つて行きました。
「あら奥様、どこかの白犬が、こんな處へ子犬を生んでゐます。」
「おやさう。」
「犬の子？」
とお母さまと正夫さんが、思はず一緒に叫びました。
「おや〳〵澤山犬の子が生れましたこと。一つ二つ……五つ六つ七つ。七つでございます。」

「おや〳〵澤山ね。」
お母さまは嬉し相に云ひました。
「どら見せてお呉れ、竹や。」
と云ひつた正夫さんは、もう嬉しくつて夢中です。
「あら可愛らしい子でございます、まだ目が見えないで、くんとん云つてをります。」
代り番に犬の子は廊下にはこばれました。黑の斑も、赤の斑も、白いのも、狸色のもゐました。皆んな芋蟲のやうによた〳〵して、正夫さんの手をなめたり、お母さまの膝にのつたりしました。お母さまは可愛い香がすると云つて、犬の子の口の乳臭いのを嗅いでみました。
「奥様」
と竹は床下から顔を出さないで云ひました。
「奥様、犬つて利口なものでございますね。菰を一枚ちやんといて、その上に子供を皆んな寢かして置きますのですよ。」
「まさか」

「奥様、まさかとおつしやいますが、本統でございますよ、どこからどうして、こんな處まで菰をはこんでまゐりましたらう。」

竹は驚いてゐます。正夫さんもお母さまも、その話には感心しました。

「一體どこの犬が、どこから這入つて、こんな處でお產をしたのだらう、本統に驚いて終ふわ。」

などゝお母さまも呆れていらつしやいました。

三

それからといふもの正夫さんは毎日毎日、日に幾度となくそこをのぞいて、親犬に水をやつたり、ごぜんをはこんだり、犬の子を引張り出して無理に牛乳を飲ませたりして、可愛がりましたから、段々犬の子は大きくなつて、肥りました。

お客でもあればお父さまも、お母さまも、正夫さんも、直ぐその犬の子の話をしました。來る人も來る人も皆んな、そんな處で中々犬がお產をするものではない、もしすれば、それは大變お芽出たい印だ、何かいゝ事が近々に來る證據だと云ひます、と話しました。臺所口へ來る出入の人々も、田舍から來た竹のお父つさんも、同じやうな事を云つて、お芽出たがつてゐました。

どんないゝ事が正夫さんの處へ來たでせう。正夫さんはそれとなくそのいゝ事の來るのを心持ちにして、一月二月と過しましたが、別に之と云ふいゝ事も來ませんでした。犬の子はもう大きくなりました。台所裏の犬小屋から、自由に御門の方へ走けて行つて、いたづら許りしました。

どんないゝ事を犬の子は持つて來るのでせう。誰れもそれを知りませんでした。それと同じやうに、犬の子が生れた晩、あの恐ろしい泥棒が斧を持つて忍び込んだ事も、菰を持つて來てそこへ敷いた事も、未だに誰れも知りませんでした。

或る日、竹はあの晩泥棒がこはした廊下の板を見つけて、おや親犬がこんなひどい事をしたと小言を云ひながら、鐵槌と釘を持つて來てその穴をふさいで終ひました。（をはり）

小猿の話

大江正野

むかし、丹波の山の奥に、たつた一人ぼつちで住んでゐる獵人がありました。

いつものやうに、一日中お山を駈けまはりましたが、小鳥一羽の獲物もありませんでした。獵人はがつかりして、暗くなりかけた細い山路を、歸つて來ました。と、その足音に驚いたらしく、ガサガサと何か逃げて行くやうな足音がしました。耳の早い獵人は、すぐに立ちどまつて、音のした方をじつと見つめました。すると、つい眼の前を一匹の親猿が小猿を連れて、逃げて行くぢやありませんか。『しめたッ』獵人は斯う口の中で叫びました。鐵砲を肩から下すが早いか、狙ひを定めると、ズドーンと大きな音をさせました。

そして、立ちのぼる白い煙の中に、大きな猿が仆れてゐるのを見て、獵人はにつこと笑ひました。そのお猿をやつこらさと肩に擔いで、さつさと家の方に歩き出しました。大分來てから、ふと後を振り返りました。と、先刻一緒にゐた子猿が、チョコチョコとついて來るのでした。

『おや、先刻の子猿だ、生けどりにしてやりませう』と、わざと親猿を見せびらかしながら、どんどん歩きました。子猿はそれに追ひすがるやうに小さな足でヨチヨチとついて來ましたが、やがて獵人の家が見える處まで來ると、どこかへ行つて了ひました。

獵人は家に歸りました。猿を庭の隅において、自分は莚の上に、薄い布團を敷いて、ぐう〳〵眠つて了ひました。

其晩のことです。夜も大分更けて、何の音もする筈のない頃、ふと、もの〻忍び込むやうな音に獵人はぱつちり目を醒しました。そして、これはきつと、庭の隅のお猿を、他の獸が、餌にする爲

に、盜みに來たに違ひない、と思ひました。そこで、そつと鐵砲をひきよせて、薄暗がりの中に、ぢつと見當をつけました。

と、どうでせう。庭の隅の方で、先刻の子猿が、すゝり泣きながら、小さい手足で、しつかりと、親猿を抱きしめてゐました。親猿は、此小猿の大好きな母ちやんだつたのです。暫くぢつと身動きもせずに、見つめてゐた獵人の目からは、大きな涙がこぼれ落ちました。と思はず獵人は、手から鐵砲をとり落しましたので小猿はその音に驚いて、逃げて行つて了ひました。

その翌夜も、又、夜中に小猿が來て、前の夜と同じやうに、母ちやんの側にすわつて、撫でたりさすつたりしてゐました。獵人は後悔しました。可哀想なことをしたと、氣がつきました。けれども死んでゐる親猿を生かして、お山に返してやることも出來ません。夜が明けるのを待つて町に持つて行つて賣りました。

その夜も又、小猿が來ました。小猿は母ちやんの姿が見えないので、其處ら邊を、探し廻りました。その翌夜も、その又翌夜も小猿は毎夜毎夜獵人の家に來て、母ちやんを探すのでした。さうして探しても〳〵、母ちやんの姿が見えないので小猿は、悲しさうな聲を擧げて泣きました。獵人は胸が張り裂けるやうでした。

小猿は、どうしても、諦めることが出來なかつたのでせう、其後も、毎夜缺かさず獵人の家に來て、泣きました。獵人も泣きました。

さうする內に、小猿は大分獵人に馴れました。夜の明方まで、獵人の家に寢て行くこともありました。獵人は、かうして毎晩來る小猿をどんなに氣の毒に思つたでせう。それですから、成るたけ小猿を驚かさないやうに、そつとしてゐました。

獵人は小猿の來る頃を見計らつて、食べものをやつておきました。小猿はそれを、おいしさうに食べました。かうして獵人は小猿を、自分の子供のやうに可愛いがりましたので、子猿はすつかり獵人になついて、大の仲よしになりました。

子猿は、とう〳〵お山に歸ることを忘れて、獵人の家の子になつてしまひました。獵人は、それつきり獵をやめました。そして、小猿と獵人はその後ながいあひだ、大そう仕合せに暮したといふことです。（なはり）

目から火が出た

山本作次

上總國の大芝といふ所に、一人の獵師が住んでをりました。毎朝、暗いうちに起きて、その前の晩かけておいた罠を、見に行くのを樂にしてをりました。

ある朝、いつものやうに、暗いうちに起きて出かけました。『何がかかつてゐるだらう。狐だらうか、狸だらうか。』など考へながら、行つて見ますと、大きな狐がかゝつてゐました。

『占め〳〵』と、獵師はひとり言を言ひながら、狐を引き上げて、肩にかついで、勢よく歸りかけました。

途々、もつとよい獲物はないだらうか、と思ひながら、竹藪の前へさしかゝりました。すると、そこにまた、貉が眠つてゐました。そこで、早速持つてゐた鐵砲で狙ひをつけて、どーんと一發打ちました。それが、みごとに命中すること、獵師はまた、

『占め〳〵』とひとり言を言ひながら、それをも肩にかついで、勢よく歸りかけました。

獵師はもう、嬉しくて、嬉しくて、夢中になつて歩きました。で、とう〳〵足をふみはづして、崖から落ちました。もう一寸で、深い〳〵谷底へ落ちるところでした。しかし、幸ひ手にひつかゝる物があつたので、それをしつかり摑むでやう〳〵攀ぢ上つて來ました。ほつと一息つくと、手にひつかゝつた物は、何だつたらうと、よく見ました。それは大きな、大きな「山の蕾」でした。獵師は急に元氣づいて、また、

『占め〳〵』とひとり言を言ひながら、それをも肩にかついで、勢よく歸りかけました。

獵師は、獲物のあるたんびに、元氣づいて、因甫のほとりへ出ました。そこには、數へきれないほど澤山な鴨がゐました。昨夜田甫に降りてゐる間に、氷ぶはりつめたのでせう。みんな氷で脚を閉ぢられたまま眠つてゐました。これを見た獵師はとび上るほど喜んで、また、

『占め〳〵』とひとり言を言ひました、そして、氷の中に眠つてゐる鴨を、一羽づゝ引きぬいては腰にはさみ、引きぬいては腰にはさみして、はさめるだけはさみました。そして

兩手を左右に上げて、腰にはさんだ鴨を見まはしながら、

『や、たくさん〳〵』と思はず大きな聲を出して大喜びで出かけました。

そのうちに、夜が明けました。太陽は東の空をまつ赤にそめて、ぐん〳〵と勢よく昇りました。今まで眠つてゐた山や川は、一時に目をさましてせい〳〵として來ました。すると、獵師の腰に、一ぱいはさんであつた鴨も目をさまして一齊に羽ばたきしました。

『おや、おや』と思つてる間に、獵師の足はもう地を放れてゐました。そして、だん〳〵高く高く上つて行きました。

『これはしまつた、どうなるんだらう』と、獵師は、今までの元氣はすつかりなくしました。そして、蒼白になつて、ぶる〳〵震へ出しました。

ところが、幸その近くに、五重塔が聳えてゐたので、その頂上に降りることが出來ました。

これを見た村の人達は驚いて、

『獵師が天から降つてきた。』と口々に言ひながら五重塔のまはりに集つてきました。澤山々々集まつて來ましたが、がや〳〵騒ぐばかりで、どうすることも出來ませんでした。すると、誰かが、

『火口綿を積んではどうだ。』と言ひました。

『あゝ、それがいい、それがいい。』と言つて、村の人達はみんな火口綿をとりに歸りました。火口綿といふのは、その頃の人達が、火を起すのに使つた綿のやうなものです。

やがて、手んでもつて來た、澤山な火口綿を山のやうに、五重塔の下に積みました。かうしておけば、五重塔の上から飛び降りても、痛くないだらうと思つたのでした。

さつきから、どうなるんだらうと思つて、心配さうに、この樣子を眺めてゐました獵師は、やつと安心しました。

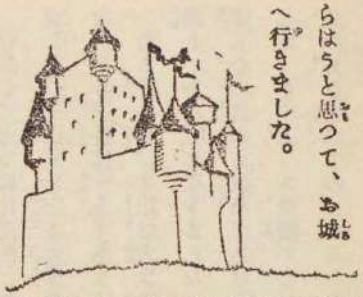
さて、飛んでみやうと思つて、獵師は下を見ましたが、急に恐くなつて、飛べなくなりました。また、勇氣を出して、飛んでみやうと思つて、下を見ますと、やつぱり恐くなつて、飛べなくなりました。そのうちに、體中がほてつて、ぢつとしてゐられなくなりました。

て、恐々飛びましたが、あんまり恐かつたので目から火を出しました。火はすぐさま、火口綿に燃え移つて、山のやうにつまれた火口綿は、見る〳〵うちに、燒けました。五重塔も、獵師も、獲物も、すつかり燒けてしまひました。（なほり）

ヂャックと豆の蔓

(一)豌豆が一粒、お庭に落ちてゐました。翌朝起きて見たら、豌豆に根が生えて、蔓が天までとどく程大くなりました。ヂャックは蔓を傳つて天へ昇ました。

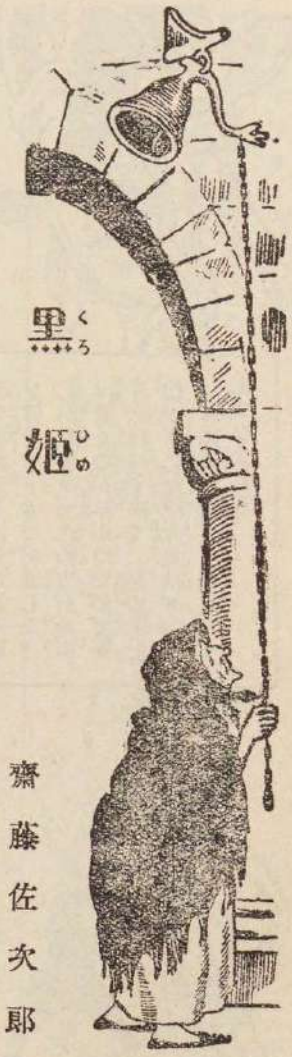
(二)蔓のてつぺん迄行つたら不思議な國へ出ました。遠くの方にお城が見えました夕方になつたので、ヂャックは泊めてもらはうと思つて、お城へ行きました。



(三)處が此お城は、人を苦しめる、恐ろしい大男の住家でした。人影のないのを幸ひ、ヂャックはお城の中へ入つて行きました。寶藏の中に澤山の金貨を入れた袋が藏つてありました。

(四)『此の金を貧乏な人達に持つて行つてやつたら、どんなにか喜ぶだらう』とヂャックは考へて、金貨の袋を持つてお城の外へ逃げ出しました。大男が物音を聞きつけて、後から追ひかけて來ました。

(五)ヂャックと大男は豆の蔓を傳つて下りて來ました。しかしヂャックの方が地面へ着くのが早かつたので手斧を持つて來て、豆の木を切りました。大男はズドーンと地面へ落ちて殺されてしまひました。



黒姫

齋藤佐次郎

一

むかし、或る國に王樣とお妃が、おねでになりました。王樣もお妃も大層お年をとつて居りましたが、お子樣は一人もありませんでした。

ある晩の事、お妃は大きなお城のお室に、たゞ獨りでおねでになりましたが、お子樣が無いので誰も心の底から慰めてあげる方が、ありませんでした。その上、お世繼がないため、御自分の國が此の先き誰のものになるのか、それさへ分らないので、お妃は泣いておねでになりました。あんまり悲しくなつたので、お妃は思はずかうおつしやいました。

『あゝ、私はたつた一人でいゝから女の子がほしい。子供でさへあれば、この夜の樣に眞黑な子でもよい。』

と、お妃が、おつしやつたかと思ふと、お城の御門の鐘が

カーン、……カーン、……

と鳴りました。やがて、鐘の音が鳴りやむと、お城の外の方で、

『どうぞ、今夜一と晩、おとめなすつて下さいまし。どうぞ、お泊めなすつて下さいまし。』と誰かふるへ聲で、言つてゐるのが聞えました。此の夜更けに、誰が來たのかとお思になつて、お妃はお城の御門を開けて、御覽になりました。ぼろ〳〵の衣服を着た、せゝしいのお婆さんが、お城の外に立つてゐました。お婆さんは、ぶる〳〵とふるへながら『今晩は、戸外が眞暗でございます。その上、今にも嵐になりさうでございます。御慈悲でどうぞ一と晩、お泊めなすつて下さいまし。』と、ねがひました。お妃は、大層なさけ深い方ですから、喜んでこの汚いお婆さんを、お城の中へ入れました。そして、その晩は、泊めておやりになりました。

お日樣が、やうやく東の空に現れたころ、お妃の寢てゐらつしやるお部屋へ、まぶしい程立派な姿をした女神が、入つてお出でになりました。女神はお星樣の樣にキラ〳〵と光る、ベイルをかぶつて居られました。お妃がびつくりしてゐますと女神はニコ〳〵と笑ひながら、かうおつしやいました。

『なさけ深いお妃樣、あなたは昨晩私がボロ〳〵の衣服をして來ましたのに、喜んで泊めて下さいました。あなたの樣に心の美しい方はありませんそれ故、あなたが昨晩泣きながらおつしやつた、願をかなへて上げませう。私はあなたの願をよく覺えて居ります。あなたは必ず、仕合せな人になれますよ。』と、女神がおつしやいました。しかし、女神のベイルがまぶしい程、キラ〳〵光るので、お妃は、目を開ける事も、出來ませんでした。や

うやくの事で、目を開けて御覽になつた時には、もう女神のお姿は何處にも見えませんでした。

二

それから暫くたつて、お妃は炭の樣に眞黑な女のお子をお生みになりました。王樣は生れた王女を、一と目御覽になると、びつくりなすつて口もきけませでした。お妃もがつかりしまして、

『どうぞ神樣お助け下さい。』とおつしやつてはお祈りをなさいました。すると『星のベイルをかぶつた女神』がまた現れました。お妃が泣いてゐるのを見て、女神がおつしやいました。

『泣くには及びません、あなたが輕々しく、あの樣な願を言つたと知りませんでした。それ故、私はあなたの願をそのまゝ、かなへて上げました。もう今となつては仕方がありません。けれど、もし、此の生れた姫が、十六の歳までお城の中から

一と歩も外へ出なければ、きつとお誕生日のあくる日に、乳の樣は眞白なお姫樣になれます。』

と、女神がおつしやつたので、王樣もお妃も、やつと御安心なさいました。そこで、生れた王女には、黑姫といふ名をつけて、姫は一と歩でもお城の外へ出してはならない、といふおふれを出しました。

三

黑姫は十四の歳まで、何事もなく、大層仕合せに暮しました。しかし、十五の歳には、お父樣とお母樣がお亡くなりになりました。さうして、今では黑姫の事を、少しも心配してくれない。ばあやと一緒に暮すやうになりました。黑姫も、もう今年は十六歳です。此の冬になれば、お誕生日が來ますから、さうすれば黑姫ではなくて、乳の樣に眞白なお姫樣になれるのです。

その年も夏になりました。黑姫はお城の外へ、少しも出られないので、泣きそうな顏をして、お庭を歩いてゐました。樹の上で唄をうたつてゐた、椋鳥が

『黑姫さん、黑姫さん、あなたは何故そんなに悲しさうな顏をしてゐらつしやるのです。』と聞きました。

『私はお城の外へ、一歩も出られないので、悲しいのです。』と黑姫が答へました

それを聞いて、椋鳥がまた言ひますには、

『黑姫さん、黑姫さん、もう少しの我慢です。あと五月たつと、あなたは何處へでも、行かれます。

もう少しの我慢です。』椋鳥が、かう言つて黑姫とお話をしてゐますと、椋鳥の背中に乘つてゐた雛鳥が、ひよいと足をふみ外しました。可愛さうに雛鳥は、ピッピ、ピッピ、と泣きながら、地面へ落ちて來ました。優しい心の黑姫は、すぐに、雛鳥を拾ひ上げて、いたわりながら、親鳥の脊中へのせてやりました。親鳥は大層よろこんで、

『ありがたうございます、黑姫さん。ありがたうございます。何時でも御用がありましたら、私をお呼び下さいまし。きつとお手助に參ります。』

と、言ひました。やがて、椋鳥は喜びながら、飛んで行きました。黒姫は椋鳥の行方を眺めてゐましたが、すぐ傍に、白バラが咲いてゐたので、それを折らうと思ひました。すると、バラが悲しさうな聲を出しました。黒姫はかはいさうに思つて折るのを止めました。そして、言ひました。

『白バラさん、私が惡うございました。もう恐るには及びをせん。私はあなたを折りません。あなたは、お母様や、お姉さまと一しよに、幸福にお暮しなさい。』

バラは大層喜んで、お辭儀をしました。さうして水晶の様な、可愛らしい聲で言ひました。

『黒姫さん、やさしい心の黒姫さん、あなたはいまに、私よりも、もつと〳〵きれいなお姫様になれますよ。――――そして、私がお役に立ちますなら、何時でもお呼び下さいまし。さつとお手助に

參ります。』

黒姫は、白バラの言ふのを聞いて、大層うれしく思ひました。それから黒姫は、お庭の奥の方へと行きましたが、上の方を見ると、樹の上に青い蛇がゐました。蛇はギョロット目を光らせて、黒姫を呼びました。

『大馬鹿の大馬鹿の黒姫さん、なぜそんなに、悲しさうな顔をしてゐるのです。さア、さア、早くお出でなさい。きれいな世界を見せて上ますよ。』

と、蛇がいひましたが、黒姫は默つたまゝ考へ込んでゐました。蛇はまた、

『利口の、利口の黒姫さん、早くこの木に上つてごらんなさい。お城の外が見えますよ。お城の外は何ときれいな處でせう。何と面白さうな處でせう。早く、早く、上つてお出でなさい。』と、言ひました。あんまりすゝめるものですから、黒姫は

した。樂しさうな音樂の音も聞えました。さうして、御殿の中では、大勢のお姫様たちが、うれしさうに遊び廻つてゐました。黒姫は夢中になつて、喜びました。そこで青い蛇は

蛇のいよ通り、樹に上つて、お城の外をながめました。すると、遠くの方に、水晶の様に、立派な御殿が見えました。高い銀の塔も見えました。御殿のまはりには、きれいな花が一ぱい咲いてゐま

また、

『黒姫さん、私と一しよにお出でなさい。あの御殿へつれて行つて、あげますよ。』と言ひました。

（つゞく）

鈴虫の鈴

野口雨情

鈴虫、鈴虫
チンチロリン
鈴何處から
持つて來た

母さんお嫁に
來るときに
番頭に負はせて

持つて來た
鈴虫、鈴虫
チンチロリン
鈴ちよつくら
貸して見ろ

貸したら返さぬ
あーかんべ
番頭に負はせて
やつちやつた

猫おぢの太夫

谷光之助

むかし、大和の國に、藤原の清廉といふ人があります。大藏太夫ともいつてゐましたが、この人は、まるで鼠のやうに、猫を怖がりました。そこで、惡戯ずきの若者などが、清廉がやつて來るのを待ち受けて、突然その足許へ猫を放り出して喫驚させたりなどしました。そんなに猫が怖かつたものですから、大切な大切な用事で出て來ても、猫を見ると直ぐ、すつかり忘れてしまふのでした。

るそこで大藏大夫とは呼ばないで、猫おぢの大夫と呼ぶやうになりました。

清廉は、山城と大和と伊賀の三國に、澤山の田を作つてゐました。その頃藤原の輔公といふ人が、

大和の守でしたが、清廉は、大和の守の處へちっとも年貢を納めませんでした。

藤原の輔公は種々と考へました。『清廉は、慾の深い人だから、とても並大抵のことでは、年貢を納める男ではない、どうしたものだらうか、このまゝにしておいては、益々心掛けの良くない人になつてしまふであらう』と心を痛めました。

ある日、輔公は、清廉を自分の家に招きました。平常は物置に使つてゐる狹い室に、輔公は一人這入つて、

『清廉が來たら、直ぐこの室に通してくれ、こっそりと話したいことがあるから』と家來に申しつけました。

やがて、清廉がやつて來ました。清廉が、その狹い室の中に這入ると、家來は外から、ぴつしやりと戸を締めて行きました。

『今日招いたのは他でもない、豫て、年貢を納めるやうに、度々申し付けたのに、未だに納めないのは、一體どうしたことなのか』と輔公は嚴かに問ひつめました。是れまで、幾度催促を受けても知らぬ顏をしてゐる程の清廉ですから、さう驚きもしませんでした。

『何しろ、此國一國のことでございませんので、山城のことも、伊賀のことも、それ〳〵、心配しなくてはなりません。』と云ひわけをしました。

『それは、よく分つてゐる、そして山城や伊賀の分はもうすんだのか』と輔公は聞き返しました。

『どういたしまして、何處もまだで御座います。今年の秋には、みんな濟してしまふ積りでございます。あなたの仰しやることは、何でも背きはいたしません、譬ひ百萬石、千萬石でも、お納めいたします。』と口先では、上手に申しましたが、心の中では『年貢の催促をするなんて、この人は貧乏なのかも知れぬ、馬鹿々々しい。』と思ひました。そこで、

『兎に角、歸つて勘定をいたしまして、この月の内に、納めることにいたしませう。』と、出たらめをいひました。

『いや、そのやうな言葉を信ずることは出來ぬ、今此處で、直ぐ納めると云ふ證文を書いて貰ひたい』と輔公はいひました。

『それでは、家に歸つて、證文を書いて參りませう』と清廉は答へました。そしてニヤリ〳〵笑ひながら、輔公の顏色を見てゐましたので、輔公はもう勘辨が出來ぬと思ひました。

『おい〳〵、先刻云ひつけて置いたものを、持つておいで』と輔公がいひますと、家來のものが五六人、戸の外から

『持つて參りました。』と答へました。

『戸を開けて中へ入れるのだ』と輔公が申しますと、一尺ばかりもある灰色の斑猫が五匹、狹い室の中に這入つて來て『ニヤー、ニヤー』と鳴きながら、清廉の袖を嗅いだり、膝にすり寄つたりしました。清廉は見る〳〵、顏色が蒼白になつて、目からは大粒の涙をぽろ〳〵とこぼしました。

『どうぞ御生ですから猫を彼方にやつて下さい。』と云つて、手を合せて輔公を拜みました。

『それでは、今證文を書くか』と輔公が請りますと、

『書きます〳〵』と、ふるえ聲で云つたので、輔公は家來にいひつけて、五匹の猫を戸の外につながせました。もし又、證文を書かぬといふなら、直ぐに猫を室に入れるやうにして置きました。

『硯を持つておいで』と輔公が家來に申しつけました。硯と紙とが清廉の前におかれました。清廉は冷汗で、びつしよりになつてゐました。

『納めて貰ふ年貢は、五百七十石餘りだから、その内、七十餘石は家に歸つて、勘定をしてからでいゝから、五百石は、今直ぐ納めるといふ證文を書いて貰ひたい。書かぬなら、先刻の猫を、又お目に掛けよう。』

と、輔公はいひました。

『いや、書きます〳〵』

と、清廉が眞青になつていひました。

そこで、流石の慾深の清廉も、猫が怖いばつかりに、大和の國、宇陀の郡の家にある、稻、米、粃の三種で五百石、直ぐに納めるといふ證文を書きました。輔公は家來のものを呼んで、其證文を渡し清廉と同道して、清廉の家にある稻、米、粃を五百石持つて歸らせました。

（ゑはり）

神様の御褒美

志谷波耶

昔、あるところに、リラとクララといふ二人の姉妹がありました。姉のリラは、その氣質も、容色もお母さんそつくりでした。お母さんも、リラも、あまり心がけがよくなかつたので、皆に嫌はれてゐました。しかし妹のクララは、お父さんそつくりで、なさけ深くて、親切で、それは〳〵可愛らしい少女でした。似たものは、お互に好きになるもので、お母さんは、姉のリラばかり可愛がつて、妹のクララを可愛がりませんでした。

お母さんは、リラには、我儘一ぱいのことさせてをきますが、クララには、一日中働かせました。とりわけ、お家から半里もある遠い泉へ、大きな瓶をもつて、水を汲みにやりました。

ある日、クララが、その泉で水を汲んでゐますと、一人のきたないぼろ〳〵の服裝をしたお婆さんが、來ました。そして、水を飲まして下さいと頼みました。

『お婆さん、ようございますとも、澤山お飲みなさい。』とクララは申しました。そして、すぐ瓶をゆすいで、泉の一ばんきれいなところを、汲んで上げました。その上、お婆さんが、樂に水を飲めるやうに、お婆さんの飲んでゐる間中、その瓶を、ぢつと支へてゐました。

お婆さんは、水を飲んでしまふと、

『あゝ お前さんはほんとうに、感心な娘さんですね。御褒美にいゝものを上げませう。』と言ひました。このきたないお婆さんは、ほんとうは、神様なのです。クララがどれだけ親切だかをためすために、わざと、こんな服裝をして、おいでになつたのです。

『私は、お前さんが口をきく度に、花だの、寶石だのが、口から出るやうにして上げませう。』とお婆さんが言ひました。

クララがお家へ歸ると、お母さんは、クララの歸りがおそいといつて、大層叱りました。

『お母さん、おそくなつてすみません。』とクララが言ひした。すると、その言葉とともに、二つのバラの花と、二つの眞珠と、二つのダイヤモンドが口から出ました。

『おや、どうしたの、この眞珠とダイヤは……』

とお母さんが、びつくりして問ひました。

そこで、クララはありのまゝを、つゝまずお話しました。その度に、澤山なダイヤモンドが口から出ました。

お母さんは、クララの話を聞いた後で言ひました。

『まあ、そんな事だつたら、姉さんのリラをやるんだつたに。リラ、一寸來てごらん。クララが口をきく度に、こんなものが口から出るんだよ。お前もこれからすぐ、泉へ行つて、水を汲んでお出で。そしてね、もしか、きたない服裝のお婆さんが來て、水を飲みたいとおつしやつたら、丁寧に、水を飲ましてお上げ。だけど、きれいな女が來たら、かまはないで、放つておくんだよ。さあ、早く行つてお出で。』

リラはブツ〳〵言ひながら、お家にしまつてあつた、一ばんきれいな銀の壜をもつて行きました。

リラが、泉へつくかつかないかに、大層きれいに着飾つた貴婦人が、森の中から出て來て、水を飲まして下さいと頼みました。

この貴婦人は、さつき妹のクララが出あつた神様なのです。リラがどれだけ不親切だかを、ためさうと思つて、わざと、お后のやうな服裝をしてお出でになつたのです。

ところが、リラは言ひました。

『何です、水をおくれつて。私はあなたのために、水を汲みに來たのではありませんよ。飲みたければ、勝手にお飲みなさい。』

まあ、隨分不親切な娘さんですね。では、お前さんが口をきく度に、嫌なものが口から出るやうにして上げやう。』と、貴婦人がいつたかと思ふと、その姿が見えなくなりました。

リラがお家へ歸ると、お母さんは喜んで、

『おゝ、リラどうでした。』と尋ねました。で、リラが

『ねえ、お母さん……』と言つて答へやうとしますと、二匹の蛙が、口からとび出しました。

お母さんはびつくりして、

『あら、まあ、どうしたの』

と思はず叫びました。そして、これは妹のクララが惡いからだと思つて、クララをぶたうとしました。クララは大層悲しんで、近所の森の中へ逃げて行きました。

丁度その時、この國の王様がく狩獵の歸りに、そこをお通りになつて、クララをご覽になりました。王様は、

『何故、そんな所で、ひとり泣いてゐるのか。』

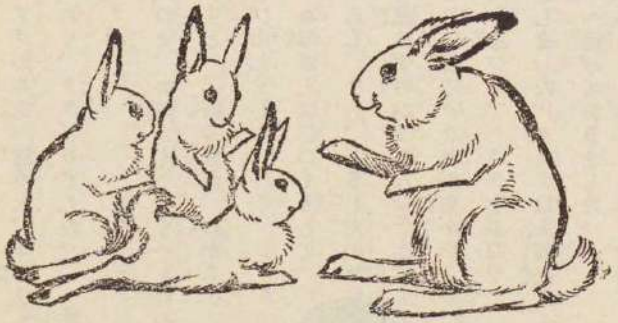
とお尋ねになりました。

『お母さんに叱られたのです。』とクララが答へますと、その言葉とともに、五つも、六つもの、眞珠や、ダイヤモンドが口から出ました。王様は驚いて、いろ〳〵とお尋ねになりました。で、クララは、そのわけを、すつかりお話しました。王様は大層可哀さうにお思ひになつてクララを御自分の立派な御殿へおつれになりました。そしてその後、クララを王女になさいました。これはクララの心がけがよかつたから、神様の御褒美なのでした。

さて、姉のリラの方はどうなつたのでせう。あんまり嫌なものが、口からとび出すので、お母さんにも嫌はれてしまひました。（みほり）

三疋の小兎

山口光次郎



年をとつた、親兎がをりました。親兎には三疋の子供がありました。三疋とも大層大きくなつたので、食物も澤山たべる樣になりました。それが爲め、兎のお母さんは皆にやるだけの食物が、無くなつてしまつたので、ある日の事、子供達を呼び集めて

『お前さん達は、もう大いのだから、お母さんの世話にならずに暮して行けるでせう。これからは、お家も自分でこしらへなさい、食物も自分でお探しなさい。』

と、言ひきかせました。

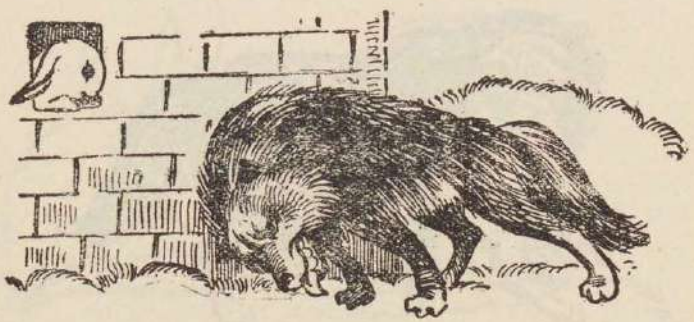
三疋の小兎は、お母さんのいひつけをよく守りました。めい〳〵に懷しいお家を離れて、廣い世界へ出て行きました。

一番はじめに出かけて行つた小兎は、途中でわらを持つた人にあひました。此の小兎は怠け者でしたから、それからさき道を歩くのは、いやだと思ひました。そこで、其の人にわらをもらつて、お家をこしらへました。

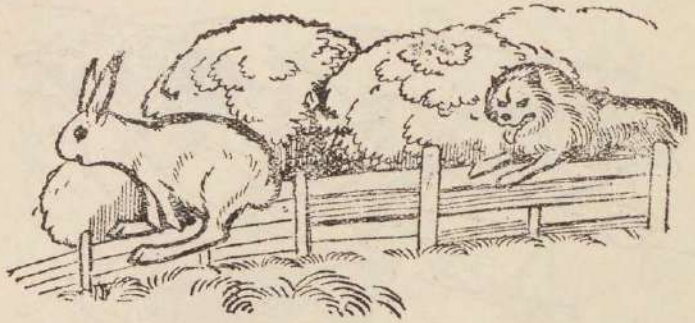
その晩、狼が出て來ました。小兎のお家はわらで出來てゐますから、すぐに壞されてしまひました。そして小兎は、狼に食べられてしまひました。

二番目に出かけて行つた小兎は、少しは働き者でした。この兎もわらを持つた人にあひましたが、それをもらはずにもう少し行くと、竹を持つた人にあひました。そこで小兎は、竹をもらつてお家をこしらへました。ところが、その晩、また狼が出て來ました。二番目の小兎のお家は竹で出來てゐますから、すぐには壞れませんでした。しかし、長く持ちこたへるだけの力はありませんから、程なく壞されてしまひました。そして小兎は、恐ろしい狼に食べられてしまひました。

三番目に出かけて行つた小兎は、大層働き者でした。この兎もわらを持つた人にあひました。次には竹を持つた人にあひました。しかし此の小兎は、わらや竹でお家を作つても、弱くて役に立たない事を知つて居ました。そこで、遠くの方まで行きました。すると、煉瓦を持つた人にあひました。これなら大丈夫だと思つて、小兎は煉瓦を持つた人にかういひました。



『どうぞ、私にその煉瓦を下さい、私のお家をこしらへるのですから。』
その人はすぐに煉瓦をくれました。小兎はそれでお家をこしらへました。
間もなく晩になつたので、狼が出て來ました。そして、外の小兎にいつたと同じ樣なことを言ひました。
『小兎さん、小兎さん、私を中へ入れておくれ。』
『だめだよ、だめだよ。お前なんか入れたら大變だ。』と、小兎がいひました。
『よし、覺えてゐろ、お前の家を打ち壞してやるぞ。』狼はかうどなりながら、お家をゆすぶりました。いくども、いくども、ゆすぶりました。けれども、此の小兎のお家は、煉瓦で出來てゐますから、なか〳〵倒れません。いくら一生けんめいにやつても倒れないものだから、とう〳〵狼がかういひました。
『小兎さん、僕はネ、いゝ大根畑のある處を知つてゐるよ。』
『何處だネ。』と、小兎がきゝました。
『それ、權兵衛さんの畑さ。もしお前さんが朝の六時に支度をして待つてゐれば、きつと迎ひに來てやるよ。ネ、さうして一緒に行かうぢやないか。』



『それはいゝだらう。』と、小兎も答へました。しかし、小兎は約束の時間よりも一時間早く五時に起きました。さうして、すぐに權兵衛さんの畑へ行つて、大根を引拔いて來ました。六時になつて狼が來た時には、小兎は自分のお家の中にちやんと歸つて來てをりました。
『小兎さん、支度は出來たかい。』と、狼がきゝました。すると、小兎がいひますには、
『仕度は出來てゐるともネ、僕はとつくの昔に行つて歸つて來たのだもの、お晝に食べるつもりで、もう澤山に大根をとつて來てあるよ。』
狼は大層怒りました。しかし、どうかして小兎をつかまへて、食べたいと思ひましたから、我慢をしてまた言ひました。
『小兎さん、僕はおいしい林檎の樹のある處を知つてゐるよ。』
『何處だネ。』と、小兎がたづねました。
『庄屋さんの庭だよ、僕はネ、明日の五時に君を迎ひに來るから、一緒に行かうぢやないか。さうして、おいしい林檎を食べようよ。』しかし、小兎は翌朝四時に起きました。さうして、狼がやつて來るよりも前に林檎をとりに出かけて行きました。今度は少し遠くまで、行かなければなりませんでした。それが爲め、小兎がちやうど林檎の樹から降りやうとした時に、狼のやつて來るのが見えました。小兎はびつくりしました。

狼はすぐに聲をかけました。

『おゝい、君は僕より先きに來てゐるんだね。それはおいしい林檎だらう。』

『あゝ、大層おいしいよ。一つ君に投げてやらうか。』小兎は林檎の實を出來るだけ遠くの方へ投げました。そして、狼がそれをひろつてる間に大いそぎで樹から降りて、お家へかけて入りました。

翌日、狼がまたやつて來ました。さうしていひますには、

『小兎さん、今日の午すぎに、緣日があるよ、君行かないか。』

『僕も行きませう。何時ごろ君は行きますネ。』

『三時に行くよ。』

狼がかういひましたから小兎は二時に出かけて行きました。緣日に行つて、大きなザルを買ひました。それを持つて、お家へ歸らうとすると、狼のやつてくるのが見えました。小兎は大層おどろきました。どうしていゝのか、解らなくなつてしまひました。外にどうすることも出來ないので、手に持つてゐたザルの中に、隱れる事にしました。さうして、小兎はザルの中に入つたまゝ、丘の上をゴロ〳〵と轉つて行きました。これを見てゐた狼は、驚くまいことか、不思議なものが、自分の方へ轉つて來るので、びつくりしてしまひ、大急ぎで自分の家の方へ、逃げて

行きました。さうして、とう〳〵緣日へ行くのを、お止めにしてしまひました。

翌日、狼はまた、小兎のお家へ來ました。そして、昨日緣日へ行く途中、丘の上から、大きな丸い物が轉つて來たので、びつくりしてしまつたと話しました。小兎は、カラ〳〵と笑ひながら言ひました。

『昨日、君を驚かしたのは僕なんだよ。僕はね、ザルを買つて持つてゐたから、その中に入つて丘の上から、轉つて行つたのさ。』それを聞いて狼は大層怒りました。よし、今度こそは、お前を喰べてしまふぞ、とどなりました。さう言ひながら狼は、屋根の上にとび上りました。家根の上には、大きな煙出しがありましたから、其處から、お家の中へ入らうとしました。それを見てゐたので、小兎は大いそぎで、かゝどに火をボオ〳〵もやしました。そして、その上に、水を一ぱい入れたお釜をのせました。その時ちやうど、狼が煙出しからお家の中へ、下りて來やうとしましたから、小兎はすぐに、お釜のふたを開けました。狼はポチャンと、にえ湯の中へ落ちてしまひました。そこで、小兎はすぐ樣お釜にふたをして、狼をぐらぐら煮てしまひました。そして、其の晩のおかずに食べました。それから後は、狼がゐなくなつたので、三番目の小兎は大層しあはせにくらしたといふことです。（をはり）

船頭の子

西條八十

橋のうへから
川見れば、
黒いはだかの
船頭の子。
午の傳馬の
舷で、
とんぼがへりを
うちながら、——
「孃ちやん、孃ちやん、
花おくれ」
乳母のみやげの

日向葵の、
花をわたすは
惜しけれど。
つい誘はれて
投げやれば、
ねらひは外れて
水のなか。
ぺろりと舌だす
船頭の子、
とんぼかへりを
うちながら、——
「孃ちやん、孃ちやん
花おくれ。」

親鳥小鳥

徳永壽美子

秀雄さんは、今日も朝から御母様の枕元に座つて、繪本を讀んで上げたり、面白さうなお話をしてあげました。また、小さな手でおつむりを撫んで上げたりして、一日暮らしました。お母様はもう半年ばかり、御病氣で寢てゐらつしやるのでした。

夕方になるとお母様は、すや〳〵とお眠りになりました。秀雄さんは、そつと障子をあけて、冷え〳〵する縁側に出ました。

空は高く澄んで、うすら冷めたい風が、靜かに吹いてゐました。お庭ぢうの草や木は、風に吹かれる度に、小さな音をたてゝ擦れあひました。それはまるで、お話でもしてゐるやうでした。また萩の枝は細そりとした長い莖に、細かい葉を繁らせて、しきりにおじぎをしてゐました。法師蟬がどこかで、おゝしいつくつく、おゝしいつくつくと、淋しさうな細い聲で啼いてゐました。

秀雄さんは縁側に腰をかけて、兩足をぶら〳〵させながら、ぼんやりとしてゐました。すると、ふと、ピッピッといふ、透き通るやうな、美しい小鳥の聲が、耳につきました。

『やあ、また啼いてゐるぞ。』と、秀雄さんは思はず、ひとりごとを云ひました。ほんとにその小鳥の聲は、毎日きつと、今頃聞えて來るのでした。そして、その啼き方と云つたら、いかにも晴れ晴れと、嬉しさうな時と、何とも云へない頼へた、悲しさうな時とありました。秀雄さんはそれが、不思議で〳〵堪りませんでした。それで今日は、丁度暇でしたから、すぐに草履を穿いて、そうつと、聲のする方へ行つて見ました。

その聲は、お庭のずつと右手の方にある、大きな椎の木でしてゐるのでした。秀雄さんはせいのびをしたり、腰をかがめたりして、すかしてゐま

したが、すぐに葉の繁みの處に、丸い、小さな鳥の巣を見付け出しました。巣のへりには、羽が薄みどりで、嘴の赤い、可愛らしい一羽の小鳥が、とまつてゐました。そして、柔かさうな喉の邊を、ふくらがしながら、大變悲しさうに、ピッピッと、啼いてゐるのでした。秀雄さんはそれを見ると、

『どうしたの、小鳥さん。』と思はず聲をかけました。

小鳥は急に啼くのをやめて、さも驚いたやうに、まつ黑な目をくるくるさせながら、秀雄さんを見おろしました。秀雄さんは氣の毒になつて、また云ひました。

『僕ね、君があんまり悲しさうに、啼くものだから、どうしたのかと思つて、見に來たのさ。』

『まあ坊ちやま。御親切にありがたうございます。』と云つて、小鳥はぴよこんと、おじぎをしました。小さなしつぽが、ついと上をむきました。

『巣の中に誰がゐるの。』

『はい。』と、小鳥はおつと中を見ながら、『私の小さな子供がひとり寢てゐるのでございます。』

『どうして？御病氣？。』

『さやうでございます。やつと巣立ちました時分に、町の方へ飛んで參りましたら、よその坊ちやんに見つかつて、石を投げられました。それ

が、あいにく脊中にひどく當つたものですから、それからずつと、寢ついてゐるのでございます。』

『そりやあ飛んだ目に逢つたね、可哀さうに。そしてまだ治らないのかい。』

『なか〳〵治りませんで、段々と弱つて參ります。』と、小鳥は悲しさうな顏をして、言ひました。

『お藥をやつてるの。』

『はい。やたらには得られない、好いお藥をやつて居ります。私は毎日々々、町を越え、野を越え、谷を越え、そのまた先の遠いお山へ、そのお藥を搜しに參りますの。朝早く出かけてもやつと夕方にしか歸れない程遠い處へ。』

『それで毎日今頃啼くんだね。さう一日飛び歩いちやあ、隨分くたびれることだらうねえ。』

『ほんとに〳〵、大變な苦勞をいたします。町を越える時には、惡い坊ちやんがたに、石を投げ付けられますし、野を越える頃には、おなかが空くので、餌を搜しに下りてゐますと、草の中から、いきなり青大將が出て來たりするんですもの。やつと谷を越えて、木にやすんでゐると、さつと下りて來た恐ろしい大鷲に、只一掴みにされさうになつたりいたします。その度に私は、どんなに吃驚するでせう。それでも、子供が可愛くつて、可愛くつて、堪りませんから、毎日々々出かけて參ります。』

『そんなに子供つて、可愛いものかい。』

『えゝえゝ坊ちやま。』と、小鳥はあるつたけの力をこめて、云ひました。『それはもう、可愛い子供の爲なら、どんな辛らい思ひでも、どんな苦しい思ひでも、喜んでいたします。時によれば子供の爲なら、自分の命をすてゝも惜しくはない、と思ふ事もございますの。まあ、一寸私の身體を御

ん下さい。』

かう言つて、小鳥は巣のへりから、ひらりと舞ひ下りて、秀雄さんの肩にとまりました。そして秀雄さんが手を出すと、その掌の上に、ちよこんとのりました。見るとどうでせう。薄みどりの柔かい羽は、方方ぬけたり、ちぎれたりしてゐました。薄赤い肌は痛痛しく、むき出しになつてゐました。怪我をした後に血が黒く固まつて、こびりついてゐる處も、あつたりしました。そればかりではありません。薄赤いきれいな、細い足は片方、すつかり皮が剝げて、びつこをひいてゐるのでした。

秀雄さんは顔をしかめながら、

『さぞ痛いだらうね。』と言つてそつと小鳥を撫でてやりました。すると小鳥は『いゝえ、子供の爲めですから何とも思ひは致しません。けれども、私がこんな思ひをして、やつとお薬になる木の實を見つけて、夕方の薄暗い道を、いきせき切つて歸つて來て見た時に、子供のかげんが、朝より少しでも、惡くなつてゐるときの悲しさと申しましたら……』と、母鳥は涙ぐんだ目を、しばたゝきました。『その代り少しでも、好くなつてゐる時は、その嬉しさと云つたらございません。』

秀雄さんはそれを聞くと、

『親つていふものは、そんなにも子供の事を思ふものかねえ。』と、しみ〴〵言ひました。

『えゝえゝ坊ちやま。鳥でさへさうでございますもの、ましてあなたがたのお父様やお母様は、どんなにお子様達のことを、御心配なさる事でせう。それこそ寢ても覺めても、どうか病氣をしないやうに、怪我をしないやうに、兄弟仲よくするやうに、お友達とはお互に親切に遊ぶやうに、學校へ行つたら、よく勉強をして立派な人になるやうにと、思ひ暮らしてお出でになるのですよ。』

『ありがたいものだねえ、ほんとに。』と、秀雄さんはしんそこから言ひました。

『さうですとも、さうですとも。』と小鳥は小さな首で、幾度もうなづきました。

その時巣の中で、ピ、ピ、ピといふ小さな弱い囀ぎ聲がしました。すると手の上の母鳥は、

『では御免下さいまし。』と言つたかと思ふと、すぐに巣の中へ飛んでゆきました。

その晩、秀雄さんは、お母さんに、小鳥の話をいたしました。すると、お母様は、

『氣の毒な親鳥だねえ、ぢやア秀雄ちやん、その子供を明日連れてお出で。お家でお薬をやつたり、手當をしてやつたら、治るかも知れませんから。』

『あゝ、それが好いでせう。』と、秀雄さんは、大喜びで、

『僕がよく見てやりませう。』と元氣よく言ひました。

あくる朝、まだ、親鳥が出かけないさきにと、秀雄んは、早く起きてすぐ、椎の木の下にゆきました。（つゞく）

バラが咲いたはじめ

吉田六郎

今から千年も昔、ユダヤの國のベテレヘムといふ市に、立派な王樣の御殿がありました。その御殿に仕へてゐた、大勢の人達の中に、それは〳〵、しとやかな、美しい少女がありました。少女は王樣やお妃樣に、大層なお氣に入りでした。御殿に仕へてゐた人達の中にも、心の惡い人がをりまして、少女の評判がよいのを、ねたみました。そしてありもしない事を王樣に告げました。少女が大層な惡者で、御殿の秘密をとなり國へ、知らせたといふ樣な、嘘事を申上げたのです。本當の事を知らない王樣は、大層お怒りになつて、

『そんな女は、火あぶりにして、殺してしまへ。』と仰いました。惡者どもは、大喜びで、少女をお刑罰場へ、引つぱつて行きました。

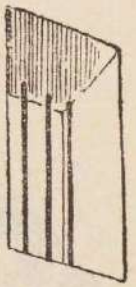
やがて惡者どもは、お刑罰場の火刑の柱に、少女をくゝりつけました。市の人たちは、『何事が起きたのだらう。』と思つて、大勢集つて來ました。その内、惡者どもは、火刑の柱のまはりに積んであつた薪に火をつけました。少女は泣きも、叫びもしないで、ぢつとこらへて居りました。しかし、心の中では、自分に罪のない事を證據だてゝ下さるやう、一心に神樣にお祈りをしてをりました。

すると、どうした譯か、火は少しも燃えひろがりません。惡者どもは、一生けんめに、燃やさうとしました。けれど、どうしても燃えません。まはりに見物してゐた市の人たちも、驚きました。やがて火は、消えてしまひました。と、不思議にも、少女をくゝりつけた火刑の柱から、見る〳〵うちに枝や葉が出て、それが生きた木に變つてしまひました。そして、其處から赤や白の、美しい澤山の花が、一時に咲出しました。市の人々は二度びつくりしました。

『あゝ、美しい花だ、こんな美しい花は、見た事がない。』と市の人たちが叫びました。惡者どもゝ、あまりの不思議におどろいて『これは神樣が守つてゐらつしやるのだ、燒く事は出來ない。』と考へました。そして、こわ〳〵と、少女の身體を木からほどきました。此の事が、王樣のお耳にも入りました。王樣は少女の罪が、みんな作り事であつたと、おわかりになつて、御自分の輕はづみを、たいそう後悔なすつたばかりでなく、惡者どもには、重い罰をお加へになりました。

さて、此時はじめて咲いた、美しい花は、何といふ花でしたらう。ユダヤの人たちの言傳へによると、此の時咲いた花が、皆さんの今見る、バラの花であつたといふ事です。

（なほり）



燕の王子

横山壽篤

今から二千年ばかり前、支那の國には五人も七人も王樣があつて、互ひに戰爭をしてゐました。其中で秦と云ふ國の王樣が一等强くて、他の國を皆亡ぼして了ひました。そして秦の王樣は、自ら始皇帝と名のつてゐましたが、亡ぼされた國々からは、始終恨まれてをりました。

始皇の住つてゐるお城の中には、阿房宮と云ふ立派な御殿がありました。東西が九町、南北が五町、高さが三十六丈と云ふ、すばらしく高い御殿でした。その屋根の上で、キラキラ光つてゐる金の鯱は、遠くからでも見えました。

始皇に亡ぼされた國の內に、燕と云ふ國がありました。この燕の王子は、秦の國の捕虜になつて、牢に入れられてゐました。王子は、長い間寂しい牢の中で、お父さまお母さまのことばかり、毎日思ひ暮してゐました。ある日のこと、王子は始皇に向つて、斯う云ひました。

『私は、もう六年も此牢の中に暮してをります。私は例令この牢屋で死んで了つても、仕方がありませんが、故郷には、年を老つた兩親が御座います。兩親はきつと、私の身の上を心配してをりませう、どうぞ、私を國へ歸して下さいませ』

すると、始皇は

『頭に白髮の生えた烏がゐたら、牢から出してやらう。』と云ひました。

王子はがつかりして了ひました。夜になると、僅かばかりの牢の隙間から、天を仰いで『どうぞ私を國へ歸して下さいませ』と、お月樣にお願ひしました。お星樣にもお願ひしました。晝は空を飛ぶ烏に言葉をかけて『私が斯うしてゐることを、私のお母さまに知らせて上げてくれませんか。』と賴むのでした。

さうしてゐる中に、阿房宮の屋根へ、頭の眞白な烏が一羽飛んで來て、カアオ、カアオと鳴きましたので、王子は飛び立つばかりに喜んで、

『頭に白髮のある烏がゐます、どうぞ私を國へ歸して下さいませ。』と始皇に訴へますと　始皇は頭を振つて

『角の生えた馬がゐたら、牢から出してやらう。』といひました。

折角頭の白い烏がゐたのに、王子は牢から出る事が出來ないので、又がつかりして了ひました。しかし、明けても暮れても、王子の胸の中は、親を思ふ心で、一ぱいになつてゐました。

すると、ある日のこと、阿房宮のお庭へ、何處から來たとも無く、一疋の角の生えた馬が來て、ヒヒヒンと、高く嘶きました。

そこで、流名の始皇も驚いて

『これは、きつと、神さまの思し召しだ。』と云つてやつと王子を牢から出してやりました。

久しぶりに、牢から出た王子は、もう嬉しくて堪りませんでした。一時も早く、お家へ歸りたい

ものだと、自分の國の方に向いて、晝も夜も歩きました。そして大きな川にさしかゝつた時には、もう夜でした。川には橋が架つてゐました。

王子は、とんとんとんとんと、足音輕く、その橋を渡り出しました。とんとんとんとん……王子が橋の半ばまで來た時に、不意に足許の橋板が落ちて、王子は川の中へ、ざんぶとばかりに墜ちました。

やがて氣がついて見ると、王子の身體は、何かふわ〳〵するもの〻上に、乘つてゐるのでした。

『あなたは燕の國の王子さまでしたね、どこかお怪我はございませんか。』と突然に言葉を掛けるものがありました。王子はは、つとして、よく〳〵見ると、その聲の主は龜でした。王子は知らぬ間に龜の脊中に乘つてゐました。王子は

『さうだ、私は燕の國の王子、丹と云ふものだ。』

と云ひますと、龜は

『矢張さうでしたか、初めてお目に掛ります。ずつと以前の事、私が人に殺されかゝつてゐる處を、王子樣のお父樣が、助けて下さいました。そして此川へ逃して戴きました。』と云ひました。王子は

『それはよかつた。併し何故橋板が落ちたのだらう、丁度お前の脊中の上へ、私が落ちて來たのも不思議ではないか。』と云ひますと、龜は

『まあお聞きなさい、それには譯が御座います、今日の日の暮れ方のことでした。私が此處で遊んでゐますと、始皇の家來が大勢やつて來て、此橋を人が渡ると、橋板が落ちるやうにして行きました。段々聞いて見ると、始皇が王子さまを此川に墜して、殺して了ふのだと云ふことでした。私は水から跳ね上るほど、びつくりいたしましたが、御恩返しをするのは今だと思つたのです。そこでどんなにでもして、王子さまをお助けしようと、お待ちしてゐた處でした。もう大丈夫です、私が向ふの岸まで渡して上げませう。』と云つて、王子を脊中に載せたまゝ、ヂャブチャブ、ヂャブヂャブと川を泳いで、王子を向ふ岸に渡してくれました。王子は岸に上つてから

『どうも有りがたう、お蔭で私は命拾ひをした。これでお父さまにもお母さまにも、お目に掛ることが出來る、どうも有りがたう』と龜にお禮を云ひますと、龜は

『どうぞ、お父さまに宜敷く申上げてください、お大事に。』と云ひました。

『左樣なら、お大事に。』

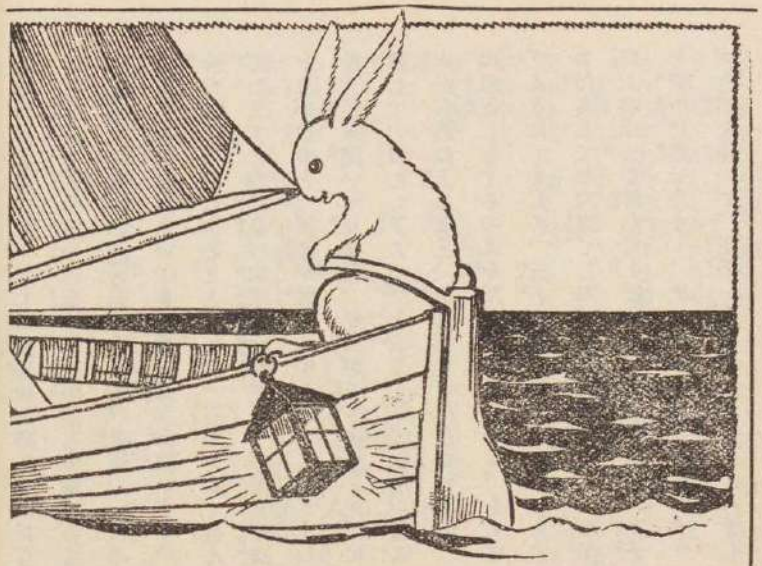
『左樣なら、左樣なら。』と云ひかはして、王子と龜とは別れました。

王子は懷しいお家へ歸つてから

『お父さま、龜が宜敷く申しましたよ。』

と云つて、此お話をいたしました。

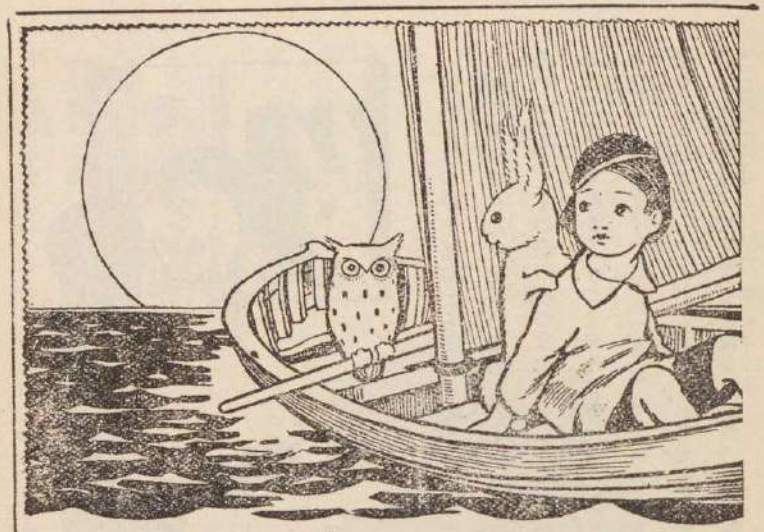
（をはり）



金の船

山田邦子

ぼうちやんよい子だねんねしな
ねんねのお子さんどこへゆく
金のお船に銀の棹
海の向ふにのぞいてる
月の都をさしてゆく



ぼうちやんよい子だねんねしな
ねんねのお子さんどこへいた
向ふに見えるまんまるな
月の都に笛吹いて
お耳の長い子兎と
ねんねのお歌をうたうてる

ララちゃん

一ノ倉隆子

誰れが作つたともわからないお家が、高いお山の麓に出來ました。七月の末の頃ですから、白百合のお花が、その邊の廣つぱに、どつさり咲いてゐました。それからずつと今迄空家になつて居たお家に、ララちやんと云ふ泣き蟲な、おいたな女の子が、お婆さんと二人で、引つこして來ました。ララちやんは、夜になると泣きました。其の泣き聲が、野を越えて、森を越えて、川を越えて、二里も三里も、遠い町迄響いて來ました。風の音の樣な、飛行機の音の樣な、變なその泣き聲をきくと、みんな怖がつて、小さくなつて居りました。

夜になりました。ララちやんは泣き初めました。お婆さんはいつもの樣に、熊に唄をうたはせました。熊は眞黑な毛に包まれて居る足を、長くして

どら聲を出して、唄ひ初めました。

お山の上から　おつこちた
するするすつてん　おつこちた
熊のこどもは
泣きません

『いやよ〳〵、そんな唄はいやよ』

とララちやんは云つて、今迄よりも、もつと〳〵大きな聲を出して、泣きました。お山の神樣は、

『まあ、やかましいこと』

とおつしやつて、兎の兎ちやんをお使ひに、およこしになりました。

『神樣のお使ひです、おしづかに。』と云つて兎ちやんは歸りました。ララちやんは、ひよつこら小さな兎が來て、すぐ歸へつて仕舞つたので、吃驚して泣き止んで居ると、お山の神樣は『おや、お悧口なララちやんだこと』とおつしやつて

『ではお悧口になつたララちやんを、つれておいで』

と兎ちやんにおつしやいました。兎ちやんはすぐに、ララちやんのお家へ、お迎ひに來ました。ララちやんはお汽車ごつこをする樣に兎ちやんの持つて來た繩につかまりますと、スーと高く上りました。すると其處に、黑い雲の子が、大勢遊んで居りまして

『やあ—泣蟲が來た—』

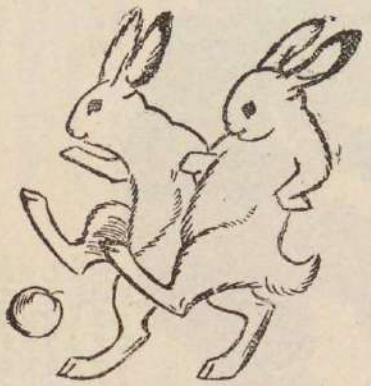
『わ—おいたの子が來た!』と囃したてましたが、

ララちやんはちつとも泣かずに、金の繩にしつかりつかまつて居りました。少し來ると、風の子が小さな風袋をかついで、風の吹き方を、お母樣に敎へて戴いて居りましたが、ララちやんを見ると『泣き蟲毛蟲……』と囃し立てました。それでも、ララちやんは、泣きませんで、神樣のお家へ來ました。神樣のお家は繪で見る樣な立派なお家で、門の處には虎が二匹、怖い眼をしてにらめて居りました。

『やい、そこへ來たのは泣蟲子ぢやあないか』と一匹の虎が云ふと、あとの一匹も『さうだ〳〵』と云つて、今にも飛びかゝらうとしました。

『いゝえ、此ララちやんは、泣き蟲ぢやあ、ありません。神樣の處へ行くのですから、どうぞお通し下さい』と兎ちやんがお願ひしましたので、御門を通して下さいました。お玄關に行かうとすると、お山に住んで居る色んな、けものが居て、『泣き蟲ではないか』と申しましたが、ララちやんは、一粒の涙もこぼさないで、やつと神樣のところへ參りました。神樣は大變におよろこびになつて、もう明日の晩から、ちつとも泣かない樣にと、おまじなひをして下さいました。ララちやんは

『ありがたう御座いました』と生れて初めて、にこ〳〵笑ひました。晝の樣に明るい神樣のお家のお座敷に、澤山の御馳走が出ました。ララちやんの大好きな、羊羹も、バナナも、お饅頭も……、ララちやんは



嬉しくて一人でニコニコして居りますと、遠くの方から細い聲の唄が聞え出しました。ララちやんがこんどは、うつとりとして聞いて居りますと、それはララちやんをお迎ひに來て下すつた兎ちやん達です。二十人も三十人も集まつて來て、其の細い聲の唄につれて、躍り初めました。唄ふ聲はだん〳〵近づいて來ました。

お山のお山のう―さぎ
月の良い夜は何見て跳ねる
と唄ふと躍つて居る兎たちが
ふもとのララちやん見て跳る

と云ひました。

お山のお山のう―さぎ
月の無い夜は何聞いて跳る
と又唄ふと、

ララちやんの笑聲聞いて跳る

と何べんも、繰り返し〳〵、唄ひながら、躍りました。ララちやんは其の樣子が面白いと云つて、お手々をたゝいて喜びました。

お悧口になつたララちやんは、夜のあけない中に、お土產をどつさり戴いて、麓のお家へ歸つて來ました

もう其れから、ララちやんは、ちつとも泣きませんでした。

（なほり）

幸福の星

須藤鐘一

一番大きいあの星は
ダイヤモンドのお星さま
幸福者のお星さま
月の母さんねるときは
ぽつぽに抱かれて寝んねする
母さんお留守の暗の夜は
お目々を醒してピーカピカ

可愛い少女の歌ふ歌がいたします。私が箱根へ來た其翌日の朝から、此可愛い歌を、毎朝毎晩、きまつて聞くのでした。

金の卵

懲兵衛爺さんといふ慾深者がありました。爺さんは、お山を越えて、里へ行きました。さうして、里であひるを一羽買ひました。

それは英語の歌でした。其歌の言葉と調子とで、それが外國の少女であることは、すぐ、うなづかれました。

私は晝近くなつてから、お友達と二人で、中禪寺湖のほとりに出ました。そしてレーキホテルの短艇に乘らうとしてゐますと、其處へ七ッばかりの、外國の少女が、ホテルの方から飛んできました。

『あなたは短艇に乘りませんか。』と私は覺束ない英語で話しかけました。

『私、母と乘ります』と少女は、赤いリボンを掛けた金髪の頭をふりながら、ニッコリして答へました。

『さう、ぢや私達と競漕しませうね。』と私が申しますと、少女は唯笑つてゐました。

『あなた、何と云ふお名前？。』と、又私はたづねました。

『メリー。』と少女はわるびれもせずに答へました。

『あなたの父ちやんはどちらへ？。』

『アメリカへ！未だ歸りません。』と物足らなさうにいふのでした。

此時、そのメリーちやんの母ちやんでせう、水色の洋服を着た、一人の外國婦人が出て來て、短艇の番小屋へ近づきました。それと見たメリーちやんは、小兎のやうに、其方へ駈けて行きました。

私達は短艇に乘つて、漕ぎ出しました。少し出てから振り返つて見ると、メリーちやんの乘つた短艇も、だん〳〵此方へ漕いで來るのでした。

此のあひるは不思議なあひるで、懲兵衛爺さんの處へ來てから、毎日金の卵を一つづゝ產みました。

月の母さんねる時は
ぼつぼに抱かれて寝んねする
母さんお留守の暗の夜は
お目々を醒してビーカビカ

私は、はつとして振り向きました。其可愛い歌は、メリーちやんの短艇から聞えるのでした。

『あゝメリーちやんだつたのだ』と思ふと、私はもうメリーちやんとは、何年も前から親しかつたやうな、懐しさを覚えました。

インキのやうな碧い湖水に、夕焼雲が、キラ〳〵と映りました。それから湖の岸に、聳えてゐる山の影が、はつきりと倒に映つてゐました。お友達と私とは、交る〴〵オールをもつて、静かに漕ぎまはりました。メリーちやんの短艇とは、近づいたり遠ざかつたりしました。船側がすれ〳〵になるほど、近づいた時私は、

『メリーちやん、あなた、大層歌がお上手ですね。』といひました。

メリーちやんはニツコリと笑ひました。

『私は其歌が大好きです、何といふ歌ですか。』

『「幸福の星」つていふの、私の父ちやんも母ちやんも大好き。』メリーちやんは斯ういつて、母ちやんのお顔を見上げるのでした。

『メリーちやん、あなた漕ぎませんか、競漕しませう。』と私は突然に申しました。

『ノー〳〵、私漕げません。』と、あどけなく申しました。すると母ちやんが、

『あなた方お上手、とても勝てません。』と云つて、ホ、、と快活に笑ひました。二つの短艇は、暫くオールを上げて、鏡のやうに澄んだ、青い水の上を漂ひました。雨上りの霧が、男體山を、環のやうに巻いてゐましたが、それも暫くの間で、山の背後の方へ消えて行きました。二つの短艇は、云ひ合せたやうに、オールを水に入れました。

『グードバイ、』といつて、母ちやんが漕ぎ出しました。メリーちやんも

『グードバイ、また明日。』と、此方へ會釋しました。

鈴さんは大喜びでした。さつそく檜の木で大きな箱をこしらへて大切に金の卵をしまつて置きました。

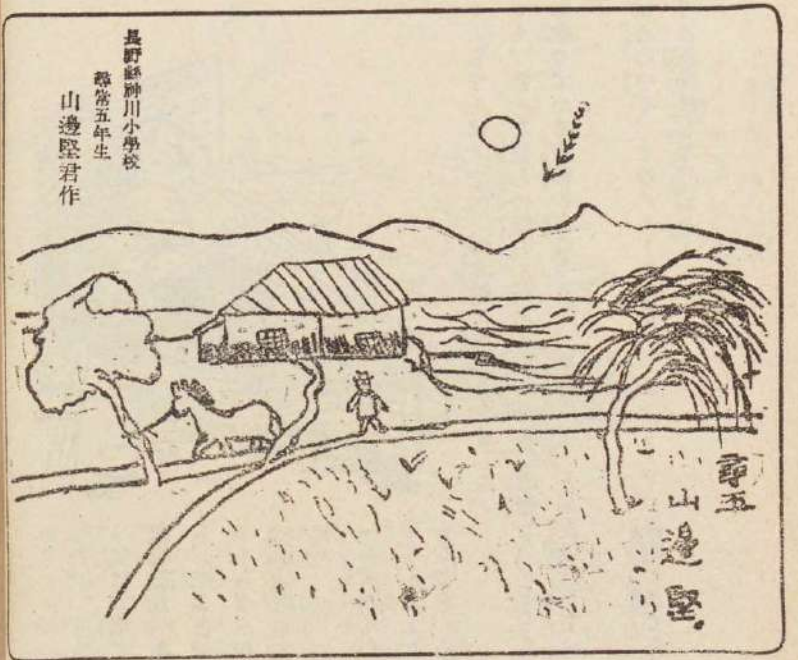
慾兵衛鈴さんは、あひるが毎日卵を一つづゝ産むのでは、我慢が出来ないで、一度にお腹の卵をみんな取らうと思つて、あひるを殺て了ひました。

一番大きいあの星は
ダイヤモンドのお星さま
幸福者のお星さま

月の母さんねるときは
ぼつぼに抱かれて寝んねする
母さんお留守の晩の夜は
お目々を醒して
ビーカビが短艇の影が見えなくなつてからも、メリーちやんの歌ふ可愛らしい聲が聞えました。私はふり返つて、思はずニッコリ笑ひました。

お腹を切つて見たが、金の卵が一つもないので、鶏さんはがつかりして、せめては今まで產んだ卵の數でもしらべやうと、箱の蓋を開けました。處が、不思議にも金の卵は、みんな雛に化けて鶏さんめがけて、飛びつきました。

私は、宿で夕御飯を食べながら、又ふと、メリーちやんの事を思ひ出しました。
『お父さんが留守で、淋しいだらうなあ、あのメリーちやんは？』と、お友達に話しかけました。
『でも、あんな優しい母ちんがあるんだから　幸福さ、メリーちやんの歌つてゐる幸福の星のやうに、幸福さ。』　とお友達は申しました。
私は心の中で、このメリーちやんが、いつも〳〵、幸福の星であるやうに祈りました。（をはり）



子供の自由畫を募る

山本鼎

子供諸君、――こんど、この雜誌で君たちの畫をいたゞいて、僕が、みんなの畫のうちから、選むだのを、毎月四つぐらゐ此處に、寫眞の版にして出すことになりました。

自由畫、といふのは、お手本や、雜誌の畫なんかを見て、描いたものでない畫のことです。君たちが、かつてに描いた畫のことです。ですから、君たちは、お手本や、雜誌の畫なんかをみて描かずに花なり、景色なり、動物なり、お母さんのお顏なり、なんでも、君たちの好きなものを、かつてに描いてごらんなさい。

お手本を見て描いたり、雜誌の畫なんかみて描いたものは、みんな落第ですよ。

それから、あんまり、うすく、ぼんやりかいてある畫は、たいそういゝ畫でも寫眞の版になりませぬから、及第しても雜誌へは出されません。そのかはり、そんないゝ畫は僕が戴いて、だいじに、しまつておきます。

大人諸君、――以上の企を御賛成下さいまし。子供達は、本來、お手本を眞似するよりも、自由に、見る所のもの、もしくは見たことのあるものを、描き度がるものです。さういふ子供には、出來るだけ、良質の畫用品を與へて下さいまし。そして、子供を愛すると同じ愛を以て、彼れの創作を迎へて下さいまし。

大人に、智、感、情、がある如く、小供にも智、感、情があります。大人に美術がある如く子供にも美術がある筈です。子供の美術は彼れの眼と手によつて自然から直接に捉へられた、そのものです。

馬鹿七

沖野岩三郎

一

紀州の山奥に、狸山といふ高い山がありました。其所には、大きな樫だの、楠だのが生え繁つてゐる、晝でも薄暗い、氣味の惡い森がありました。森の中には百穴といふのがありました。其の穴の中から、お腹の膨れた古狸が、夕方になると、百疋も二百疋も、ノソ〳〵と這ひ出して來て、ポコ〳〵〳〵と腹鼓を打つて踊つたり跳ねたりするといふので、村の人達は、誰も其の森の中へ入つて行かなかつたのです。

所が此の村に、七郎兵衛といふ五十あまりの男がありました。一度其の狸の腹鼓を聞いて見たいものだ、狸の踊る樣子を見てやりたいものだと思ひまして、或日の夕暮に、唯一人其の森の中へ入つて行きました。

七郎兵衛は少し馬鹿な男でしたから、村の人達は、馬鹿七、馬鹿七と呼んで居ました。七郎兵衛自身も、馬鹿七と云はれて平氣でゐました。

馬鹿七は腰に山刀をさして、手には竹の杖を一本提げてゐました。そして段々〳〵、山を奥へ奥へと登つて行つて、大きな暗い〳〵眞暗い、森の中へ入つて行きました。

『何と大きな楠の樹だなア、何と大きな樫の樹だなア。』と呆れながら、馬鹿七は眞暗い森の中で木の根に腰をかけて、腹鼓の鳴るのを、今か〳〵と待つて居ました。けれども一時間待つても、二時間待つても、ちつとも狸は出て來ませんでした。馬鹿七はとう〳〵待草臥れて、ウト〳〵と其所へ寢て了ひました。

暫くして、不圖眼を覺して見ると、これはまア何といふ不思議な事でせう。馬鹿七の前には、可愛い〳〵小い狸の仔が、百疋も二百疋も、きちんと座つてゐました。そしてお行儀よく並んで、馬鹿七の方を一生懸命に見詰めて居るぢやアありませんか。馬鹿七は吃驚しましたから、腰の山刀をスラリと引拔いて、振廻しました。すると、其の可愛い狸の仔の姿が、掻消すやうに消えて了ひました。そして、森はまた元の眞闇になりました。

すると、馬鹿七は又、ぐう〳〵と鼾をかいて、寢て了ひました。暫くして眼を覺して見ますと、今度は大きな親狸が、まん圓い膨れたお腹を、ずらりと並べて、百も二百も並んで居るのです。そして皆な、小い棒切れを兩手に持つて、今にも其の太鼓を打ち出さうとしてゐるのです。

馬鹿七は、躍り上つて喜びました。『しめたぞさうぢや、其の太鼓を打いて聞かせて呉れ！』と云つて、ニコ〳〵笑ひ乍ら、竹の杖に縋つて伸

上つて見ますと、森の中一面に、大きな古狸が、何百何千となく座つて居るのです。

『大變な狸だなア、今度は山刀を拔いて脅かしはしない。さア一つ其の腹鼓を打いて呉れ！』と云つて、また木の根に腰を掛けると、古狸は一齊にボンボコ〳〵〳〵と、腹鼓を打き出しました。すると最前何所かへ逃げた、小い可愛い仔狸が、ヒョコ〳〵〳〵〳〵と、面白可笑しい手付腰付をして、踊り出して來たのです。

馬鹿七は餘り面白かつたもんだから、時何の間にか、自分も其の仔狸の群へ変つて、自分が平生好んで歌つてゐる、歌を唄ひながら踊りました。そして踊り疲れて、パッタリ森の中に倒れて眠つて了ひました。翌る朝眼を覺して見ますと、狸らしいものは、其所らあたりに一疋も居りません。自分が仔狸と一緒に、踊つたらしい形跡もありませんでした。馬鹿七は首を傾げながら、森を出て山を降りて、村へ歸りました。

二

馬鹿七は村の人たちに、此の話を致しました。けれども皆な『嘘だ〳〵、そんな馬鹿な事があるものか。』と言つて、信じませんでした。

『嘘だと思ふなら、皆さんも森の中へ行つてごらんなさい。』と馬鹿七が言ひました。

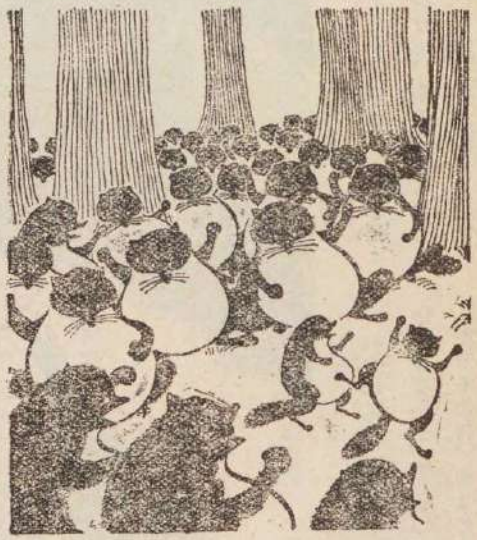
『だつて、昔から誰も行かない森だもの、入つて行くのは氣味が惡いから……。』と云つて、矢張誰一人、森へ入つて行かなかつたのです。けれども馬鹿七は、大抵月に三度づゝは、此の森の中へ入つて行きました。そして、いつも其の面白い腹鼓をきいたり、踊りを見ては喜んで歸つて來たのです。

村の庄屋の息子に、智慧藏といふ男がありました。長い間江戸へ出て、勉强して歸つて來ましたが、馬鹿七の話を聞いて、

『其樣な馬鹿な話があるものか。夫れは迷信といふものだ。』と言ひました。しかし馬鹿七は頭を横に振つて、

『いゝえ、迷信でも嘘でもありません。私は確かに太鼓の音を聞くのです、踊りを見るのです。これより確かな事があるものですか。』と言ひました。

そこで、智慧藏は村の若者を十人伴れて、自分は長い鎗を提げ、若者には、刀を一本づゝ腰に差させて、馬鹿七と一緒に、山へ上つて行きました。



『森が見えました。狸の腹鼓は彼の森の中で聞くのです。』と言つて、馬鹿七が森の方を指しました時、もう若者の顔は眞蒼になつて慄えて居ました。

『狸が出て見ろ、片ッ端から刺殺して了ふから……。』智慧藏は元氣らしく言ひました。

皆な其所で松明へ火をつけて、森の中へ入つて行きました。そして今か〳〵と待つて居ましたが、何時まで待つても、狸らしいものも、鼠らしいものも、出て來なかつたのです。

『夫れ見ろ、馬鹿七の嘘吐き！　何も出やしないぢやないか。』と云つて智慧藏が大聲で呶鳴りました。その時、向ふの大きな樟の木の蔭から、ポン〳〵ポンポコ〳〵と、面白い太鼓の響が聞えて來ました。

『やア、來た〳〵、そうれ、彼の大きな狸を御覽！　三百、四百、五百、あれ〳〵彼の小い可愛い仔狸を御覽、あれ〳〵……。』

馬鹿七は、既う面白くて堪らないやうに、自分も踊り出しました。智慧藏は鎗を身構へました。若者は皆な、刀へ手を掛けました。しかし太鼓の音がするだけで、狸も何も見えませんでした。

『夫うれ、來た〳〵、そうれ、其の足許へ來たぢやないか。やア〳〵今晩のは滅法大きい狸ぢや……』と云つて馬鹿七が叫び乍ら、狂ひ出したので、若者は急に氣味惡くなつて、松明を其所へ投げ棄てゝ、一目散に森を駈け出しました。智慧藏も最う堪らなくなつて、森を逃げ出しましたが、無茶苦茶に、下の方へ轉びながら走つて來て、十五六町も來たと思ふ時分に、振返つて見ました。すると、森は一面の猛火に包まれて、焰々と燃えて居ました。夫れは、若者達の投げ捨てた松明の火が、落積つた木の葉に燃え移つて、夫れが枝から枝に、段々と燃え廣がつたのでありました。

三

火事だ、火事だ、山火事だ！と云つて、村の人達は、皆な麓まで駈けつけて來ましたが、何樣何千年も、斧を入れた事の無い、大きな森の大木が、燃え出したのだから、見る〳〵うちに、山一面が火の海になりました。

山火事は七日の間續きました。そして高い高い狸山は、一本の生木もないやうに燒かれて了ひました。火事のあとで、村の人達が上つて行つて見

ますと、百穴の中から、這ひ出して來た古狸も仔狸も、皆な燒けて死んで居ました。

『これでいゝ、もう狸も出ないし、下らない迷信もなくなつた。』と云つて、智慧藏は喜びました。しかし村の人達は馬鹿七が、どうなつたのだらうかと言つて、心配をし初めました。燒跡をすつかり調べて見ましたが、人間らしい者の、屍骸は見つかりませんでした。

『あんな馬鹿な男は、どうなつたつて宜いぢやないか。』と智慧藏は言ひました。しかし村人は、馬鹿七の爲に心配してゐました。

所が其翌年から、此村に雨が一滴も降らなくなりました。もう川も谷も、水が涸れて了つて、飲む水にも困るやうになりました。田や畑の作物は悉皆萎びて、枯れて了ひました。で、多勢はお宮の境内で、太鼓を打いて歌ひ乍ら、雨乞踊をいたしました。智慧藏は其の音頭を取りました。

三百人も四百人も集つて、聲を嗄らして歌ひ乍ら、雨乞踊りを踊つて居ますと、其所へ向ふの方から、青い物を荷つた男が、一人やつて來ました。能く〳〵見ると、夫れは馬鹿七でありました。

『馬鹿七さん、あなたは燒けて死んだのぢやア無かつたのですか。』智慧藏は問ひました。

『いゝえ、斯の通り生きて居ます。私は山火事が起つたので、直ぐ隣村へ杉苗を買ひに參りました。御覽なさい。此の通り杉苗を三千本買つて參りました。』

『まア、小い杉苗ですね、これを何うするつもりですか。』

『これを彼の狸山へ植ゑて、元の通りの森にするのです。』

『こんな小い苗を植ゑて、元の森にする？　何

年後に大きな森になると思ふ？』

『さうさなア、三百年も經てば……。』

『はゝゝゝは、』と智慧藏は笑ひました。皆なも一度に笑ひました。そして又太鼓を打いて踊り始めたのです。馬鹿七は、さつさと山へ上つて行きました。そして、土を掘つて丁寧に、其杉苗を植ゑました。二十日目に山を下りて來た時、村の人達は、矢張り雨乞踊りを踊つてゐました。馬鹿七は小高い所から、ぢつと其踊りを眺めて居ましたが、不思議にも村の人達が、皆な狸に見えるのです。

『あすこで狸が踊つて居る？　狸が腹鼓を打つてゐる？　いゝや、あれは人間ぢや、此村の馬鹿な人達ぢやらう？　いゝや、狸だらう？　はてな……』と頻りに頭を傾げて考へてゐました。所が其處で段々と近寄つて見たが、どうしても、智慧藏を初め皆なが、毛ひくぢやらな、腹の大きい狸に見えるのです。

『おういゝ〳〵、お達は皆な狸なんか、此村で本當の人間は俺一人なんか……』と云つて馬鹿七は、おいゝ〳〵と大聲をあげて泣いたさうです。

夫れから何百年も經つて、狸山は又元の通りの、大きな森になりました。馬鹿七の植ゑた杉苗が、最う幾抱えもある大きなものになつて、高く聳えてゐます。そして此村は、五日目に風が吹き、十日目に雨が降り、田畑の作物が大變によく實ります。毎年秋の末に、村の人達が木の刀を腰にさして、狸山へ登つて、其所で太鼓を打いて、狸の假面を被つて踊ります。森の中にはお宮があつて其お宮を『馬鹿七權現』と申します。そして村人の被る狸の假面を『智慧藏假面』と申します。しかし村人の誰れもその由來を知つたものはありません。（なはり）

「金の船」誌友募集

「金の船」を立派な雜誌にすると共に、みなさんの便利を計る爲に、「金の船」の誌友を募集することになりました。みなさん、どうぞ振つて誌友にお成り下さい。これから先、「金の船」をますく立派なものにするには、どうしても、みなさんのお力を借りなければなりませんから。

「金の船」誌友になるには、別段むづかしい規則はありません。誌友の資格は、三ヶ月分以上、前金で注文すればよいのです。一反誌友になつておけば、將來種々な特典があります。くわしく知りたい方は葉書でお問ひ合せになれば、直ぐにお知らせいたします。

通信

□この欄では、みなさんの通信をのせます。みなさんは、批評や、感想などを、どしどし通信して下さい。また、地方の童謡なり、傳說なりで、まだ、みんなに知られてゐない、めづらしいのがあつたら、どうか知らして下さい。それから、こどもに關する、興味ある研究や、意見などがあつたら知らして下さい。

少年少女諸君も、どしく、通信してください。（記者）

□近頃になつて、こどもの讀物に新運動が起りました。此の意義ある運動によつて、惰氣滿々としてゐた子供の讀物が、どれだけ、改善されたか知れません。從來のこどもの讀物は五年前も十年前も、殆ど同じ物で時代と共に少しも進歩してゐませんでした。處が一部の人々の努力によつて、最近こどもの讀物が一變しやうとしてゐます。此の尊敬すべき新運動はこどもの讀物の詩的、藝術的方面を十分に開拓しました。しかし、惜むらくはこどもに無くてはならぬ道德的、教訓的方面を閑却してゐる傾があります。その上、程度が高まり過ぎて、こどもの讀物らしくない觀なさへ呈して來ました。吾々は此の新運動の意義ある方面は何處までも見習つて行きます。併し同時にその足りない方面を補つて行かなければならないと思ふのです。如何に教訓的方面がこどもに必要だからと言つて、吾々は學校で教へる修身を雜誌の上で繰返さうとするのではありません。修身的お話は、學校で毎日聞かせるので澤山です。それ故吾々は佛蘭西などの教科書の樣に、面白い童話の中から自ら人として學ばればならぬ事を教へて行く樣なものを發表したいと考へてゐます。併し、此の種の話ばかりを掲げやうとするのではありません。上品な、快活な、ユーモラスな話は、子供になくてはならぬものですから、此の方面にも力を盡して行く事は勿論です。

此の外、吾々の雜誌は何處までも子供のものであらしめたい爲めに、讀物の內容を出來るだけこどもらしい物にしたばかりでなく、言葉もこどもの持つてゐる言葉で書いて貰つた積りです。また、雜誌の體裁もこどもらしくと思つて、組方などにも相當に注意しました。今迄の多くの子供雜誌は大人の雜誌と殆ど同じ樣な活字の組方をしてゐたのです。（佐次郎）

創作募集

□少年少女の創作

自由畫 自由畫のことは、山本鼎先生が、本誌の七十頁に書いて下すつたから、ごらん下さい。

綴方 綴方は、みなさんが、見たこと、思つたことを、ふだん遣つてゐる言葉で書いて下さい。

童謡 は山なり森なり花なりを見て、感じたことを、みなさんの好きなやうに、詩にして下さい。

（注意）

□自由畫はなるべく、半紙位の畫用紙に畫いて下さい。

□綴方、童謡は用紙も字數も、みなさんの自由です。

□住所、姓名、年齡などは落さないやうに、學校へ行つてゐる方は學校名と學級を、ちやんと書いて下さい。

□人のものを眞似たり雜誌や讀本や綴方の手本など見て書いたのはいけません。

□よく出來たのは、雜誌にのせます、中でも優れたのには賞品をさしあげます。

□一般作家の創作

內容は素より、形式に於ても、表現に於ても、從來の古い型を破つた新しみのある童話童謡を募集いたします。

讀案はとりません、全く創作でなければなりません。

□定價一冊貳拾錢 送料壹錢
□三ヶ月分三冊（送料共）六拾錢
□半年分六冊（送料共）壹圓貳拾錢
□壹ヶ年分十二冊（送料共）貳圓三拾錢
振替口座東京參〇五七貳番

廣告料は御照會次第お答へいたします

（送金の注意）
▽御注文は必ず前金で御拂込み下さいう御願ひします
▽送金は小爲替でも切手代用でも宜敷
▽切手代用は一割增に願ひます
▽御注文の場合は何卷何號よりと云ふことを明瞭に書いて下さい
▽住所姓名は丁寧に分りよく御書きください

大正八年十月四日印刷納本（毎月一回）
大正八年十一月一日發行（二日發行）

編輯人 齋藤佐次郎
發行人 横山壽篤
印刷人 河上房太郎
印刷所 東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地 三協印刷株式會社
發行所 東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地 キンノツノ社

ほるぷ出版複刻版'83

大正八年十一月四日印刷納本
大正八年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

兎、兎
何を見てはねる
十五夜お月さんを
見てはねる。

みなさまは「ナカヨシ」と云ふ可愛らしい繪雜誌を御存知ですか？「金の船」が一等上の兄さんで、その次は「日本の子供」。「ナカヨシ」は一等末の妹なのです。美しくて上品で、面白くて爲になる繪とお話とで一ぱいです。それですから、みなさまから大歡迎を受けて、早く賣り切れてしまひます。どこの本屋でも賣つてゐますが、若し賣り切れでしたら、直接本社へ御申込み下さい。定價は壹部拾錢、送料五厘、半年分六冊送料共六拾錢、壹ヶ年分十二冊送料共壹圓貳拾錢　發行所　東京九段キンノツノ社（振替東京三〇五七二番）です。

東京　キンノツノ社　發行

大正八年十月六日（第三種郵便物認可）（毎月一回一日發行）